

娘が母親から自立する過程

— 負債感と価値観の捉われに注目して —

尾 野 はな子

近年、日本をはじめとした国々において、高学歴化、晩婚・非婚化の進行に伴いライフコースが多様化することで、若者の自立が遅延化している。親からの自立を考える際、全ての親子の組み合わせ（父・母×息子・娘）の中でも母と娘の関係性が一番強いと考えられている。水本（2018）は全ての親子の組み合わせの関係差を検討し、他の関係性と比較して母娘関係の信頼関係と親密性が総じて高いことを示している。本研究では従来の親からの自立とは異なり、適応的な精神的自立を「親との信頼関係を基盤として親から心理的に分離して親とは異なる自己を築くこと」（水本・山根, 2011）と考えた。

娘の自立を促す要因については水本（2016）において「母親への心づかい」は母親からの自立を促し、「母親の価値観への捉われ」は自立を抑制すると示されている。今回筆者は「母親への心づかい」に注目した。「母親への心づかい」の項目は感謝の感情を含むものとして作成されていた。日本の文化の傾向として感謝感情には負債感を要素として含むとされており（藤澤・内藤, 2015）、負債感とは他者に返礼するように義務付けられた心理的状态とされており（西川, 1986）、負債が大きいほど返報行動を喚起するとされている。親に育ててもらったということは援助を受けており、それによる負債感と返報行動は特に大きいことが想像される。娘が母親への負債感が高い場合、娘の自立に向けた感情や行動は抑制されるのではないだろうか。

本研究では、母親からの自立の過程において娘が抱いていると思われる価値観の捉われと負債感に注目した。まずは負債感が自立を妨げる要因の一つと想定し、仮説の検討を行い、その後娘が価値観の捉われと負債感を過去に体験していると仮定して、それらをどのように体験し現在へと向かってきたかの体験と過程をインタビュー調査にて検討した。

結果、母親への価値観の捉われについては先行研究と同様に母親からの自立を妨げる要因として関連があると示されたが、負債感については有意な結果は示されなかった。インタビュー調査では、得られた語りを「複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）」を用いて検討した。個人の語りから得られた要素から最終的に総合TEMを作成した結果、娘が母親から自立する過程において、自立を促す要因として「母親と自分は違うと気付く」「母親という存在が絶対ではないと気付く」「母親と程よい距離感で付き合う」「自らも与える側に回る」が、妨げる要因として「母親との過度な密着解消が難しい」「母親の人生に巻き込まれる」「母娘を取り巻く資源の不足」が見出された。

本研究では娘に焦点を当てて検討を行ったが、検討中幾度も母親の視点の必要性を感じさせられた。今後の課題として、娘と母親双方の視点から同じ時間の体験を検討することで、より自立の検討が進み女性支援に活かせると考える。